不登校経験を持つ女子大生の父親および母親像の変化

Changes in the image of fathers and mothers of female college students who have experienced school refusal

大用 ゆきの
Yukino Daiyo

大妻女子大学大学院 人間文化研究科 臨床心理学専攻 修士課程

キーワード：不登校，父親および母親像の変化，女子大生
Key words：School refusal, The image of fathers and mothers, Female college students

１．研究目的

1-1. 不登校児童・生徒の現状

近年，不登校児童・生徒の増加は社会問題となっている．文部科学省の調査（2023）によると，小・中学校における不登校児童・生徒数は前年度より 5 万人以上多い過去最多の 299,048 人（前年度 244,940 人）と大幅に増加しており，ここ 10 年連続で増加している．また，学年別の不登校児童・生徒数は，小学校では学年が上がるにつれて増加，小学 6 年生から中学 1 年生では約 1.7 倍に急増，中学 2 年生で最も多くなり，中学 3 年生で同程度に推移するということが報告されており，特に思春期における不登校へ対応が一つの課題であるといえる．不登校児童・生徒とは「何らかの心理的，情緒的，身体的あるいは社会的要因・背景により，登校しないあるいはしたくてもできない状況にあるために年間 30 日以上の欠席をした者のうち，病気や経済的な理由による者を除いたもの」と定義されている（文部科学省初等中等教育局,2003）．

1-2. 当事者以外を対象とした不登校研究

不登校研究では，当事者が相談場面に訪れることが困難であったり，研究に協力してもらうことへの困難さがあるため，これまで当事者の親や教師を対象に行ったものが多く発表されている．当事者の親を対象とした研究では，母親が相談に来ることが多く，キーパーソンとなっている場合が多いことや，外部からの働きかけによる母親の変化が不登校によい影響を与えることが報告されている（鍋田,1999；齋藤ら,2005；松本,2004；前田ら,2020）．また，学校現場からの不登校支援として，児童・生徒を取り巻く学校環境全体を整えることは不登校の予防的な支援に繋がり，不登校児童・生徒数の減少に影響する可能性がみられるとの指摘されている（岸田,2009）．そのため，不登校支援において母親支援，学校環境の整備など不登校当事者を取り巻く環境からのアプローチが有用であると考えられる．その一方で，不登校当事者とその保護者，学校には，不登校に対しての認識のずれがあることもこれまでの研究で明らかになっている（岸田,2009；原田ら,2022）．原田ら（2022）は不登校経験者とその保護者の不登校をめぐる意識差について検討した．その結果，不登校当時の学校に対する支援ニーズとして，保護者からは「しっかりと話を聞いてほしい」「認識してほしい」といったニーズがみられる中，不登校児童からは「学校からの積極的なかかわりを求めない」ニーズが目立った．また，不登校の要因についても，文部科学省（2023）が教育委員会を対象とした調査では，「無気力，不安」「生活リズムの乱れ，あそび，非行」といった「本人に係る状況」が最も多いと報告されている．一方で，小柴（2017）は不登校経験者を対象に不登校発生の背景要因について検討し，「自分自身のこと」「家庭・家族の状況」「学校でのこと」の 3 つの要因が絡み合って発生していることを明らかにしている．このように当事者の視点と当事者以外の視点では不登校の捉え方に差がみられる．

1-3. 当事者を対象とした不登校研究

不登校経験者を対象とした研究では，子どもから見た母親の対応に焦点を当てたものが多い．松井・笠井（2013）では，不登校経験者がレトロスペクティブな視点から不登校当時の周囲のかかわりを振り返り，親が子どもの状況に合わせて選択肢を与える言動は子どもの主体性を欠くことに繋がり，不登校状態を継続させることが指摘されている．さらに，不登校の家庭要因について検討し

た青田（2005）では，母親が子どもの不登校に対して，広く行われている「登校刺激を与えない対応」は無意識的に登校促進意欲が抑制される事態を生起させ，不登校を許容・容認する対応になりかねないことが示唆されている．このように母親の対応が一要因となって不登校は維持・悪化しうることが指摘されている．しかし，不登校当事者が親の対応をどのように認識し，受け止めていたかに焦点を当てたものは少ない．心理臨床の実際においては，当事者と親，双方の視点を取り入れて不登校を捉えたうえで適切な支援をすることが求められるのではないだろうか．また，その当事者が重要な他者とどのような関係性を持っているかも重要視されている．

1-4. 精神分析的な人格理論

本研究において筆者は，対象関係の視点から不登校当事者の親イメージに焦点を当てたいと考えている．精神分析的な人格理論では，幼少期からの父親・母親との関係性や相互交流によって形成された対象表象（親イメージ・幼児的な超自我）や親との関係性が内在化した対象関係がその後の対人関係の在り方を導き出すと考えられている．その後に，この対象表象は発達に伴い対人関係において修正され，より適応的なものへと置き換えられ成熟していく（石川,2019；井梅,2011）．特に思春期には，親の制約や押し付けに反発し，両親，特に母親から物理的に距離を取り，心理的にも親から独立しようとする．乾（2009）はこの時期は幼少期からの親との対象関係を内在化した，幼児的な超自我と自我理想を同年代あるいは成人期にふさわしいあり方に再構成する時期であると指摘している．このような時期の現実の生活のなかでの両親との関係だけではなく，それを不登校当事者がどのように認識し，受け止めているかという対象関係の視点を取り入れることは，不登校の過程を捉える一助となるのではないだろうか．

1-5. 対象関係と不登校の関連

対象関係と不登校の関連について，鳥居（2007）は学校に通う中学生と不登校状態にある中学生を対象に質問紙調査を行い，対象関係と不登校傾向の関連を検討した．その結果，対象関係の歪みと不登校傾向との間には密接な関連がみられた．個人の対象関係の歪みは周囲とのズレを感じさせ，葛藤を生じさせることが示唆された（鳥居,2007）．また，松尾・相模（2003）は不登校当事者にインタビュー調査を用いて，不登校生徒のもつ母親イメージの研究を行った．その結果，不登校児童生徒のもつ母親イメージは保護的で，肯定的であり，肯定的であるほど，程よい心理的距離を築くことができていることを明らかにした．しかし，鳥居（2007）の研究は量的な研究で行われており，松尾・相模（2003）の研究は母親のみに焦点を当てており，不登校に関連があるとされている父親（白石ら,1994；青田,2005；前田ら,2020）についての言及はされていない．

1-6. 本研究の目的・意義

そこで，本研究では思春期に不登校を経験した者にインタビューを行い，両親イメージを対象関係の視点から検討することを目的とする．本研究の意義として，両親イメージと不登校との関連を明らかにすることは不登校児童生徒の理解や家族に働きかけるという視点を発見することに繋がり，不登校支援がより効果的なものになることが期待される．

当初，不登校経験を持つ女子大学生を対象にインタビューを行うことを想定していたが，1 年間の研究を通して，調査対象と調査方法を以下に変更した．

方法

調査対象：思春期にあたる中学生時代に不登校になり，中学生時代あるいは高校生時代に学校復帰を果たすことができた不登校経験者（女性）3～5 名．

調査方法：現在は学校復帰を果たすことができ，不登校経験を語ることができる方に調査依頼を行い，同意をいただけた方に半構造化面接を用いたインタビュー調査を実施する．また，イメージを捉える手がかりとして投影的手法を用いる予定である．

分析方法：質的な研究で行う予定である．

２．研究実施内容

5 月～2 月にかけて不登校に関する文献の収集及び検討を通して，これまで研究されてきた不登校経験者の両親像についての情報を得ることができた．また，日本心理臨床学会第 42 回大会に参加し，不登校や分析方法に関する臨床的な知見を得ることができた．9 月～3 月にかけて適応指導教室での実習を実施し，不登校児童生徒についての理解を深めることができた．3 月には専攻内で行われた修士論文構想発表会にて，発表を行い，様々なご指摘をいただき，より詳細な研究計画へ修正を行った．

３．まとめと今後の課題

今年度は不登校や分析方法についての理解を深めた．今後の課題としては，3 月中に不登校児童生徒を対象としたデイキャンプへの参加，4 月から不登校児童生徒が多く通う精神科診療所で実習を実施し，不登校についてさらに理解を深める．そして，不登校と対象関係との関連についての検討を行うために必要な研究計画を完成させ，4 月に大妻女子大学生命科学研究倫理委員会に研究計画を提出し，承認が得られ次第，調査を実施する．承認後～10 月にインタビュー・分析を行い，11 月～1 月に結果・考察とまとめ，修士論文として提出する．

付記

本研究は，大妻女子大学人間生活文化研究所平成 5 年度大学院生研究助成（B）（DB2327）より研究助成を受け行っている．

主要参考文献

青田泰明（2005）.不登校現象の家庭要因に対する一考察：「学校への意味付け」にかかわる文化的再生産　慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要,60,29-42

原田直樹・梶原由紀子・田原千晶・増滿誠・松浦賢長（2022）．元不登校児童生徒とその保護者の不登校をめぐる意識差と家族機能についての研究　福岡県立大学看護学研究紀要,19,1-12

前田利江・鈴木美樹江（2020）．思春期不登校の子どもを持つ母親の心理変容過程についての一考察 心理臨床学研究,37,537-548

松尾美耶・相模健人（2003）．不登校生徒のもつ母親イメージに関する研究：インタビューと心理アセスメントを用いて　鳴門生徒指導研究,13,126-141

文部科学省（2023）．令和 4 年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要　令和 5 年 10 月 4 日〈令和 4 年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果の概要（mext.go.jp）〉（2024 年 2 月 27 日）

鳥居勇（2007）．対象関係からみた中学生不登校とそのレジリエンスに関する研究－一般群と不登校傾向群・不登校群との比較－　中京大学心理学研究科・心理学部紀要,7,19-28